諸國奇談

西遊記續篇 一

内閣文庫
和書
三一五九〇號
類
一七二函
一〇冊
五架

史七二

内閣文庫
番號 和 31590
冊數 20（16）
函號 172 86

国立公文書館
National Archives of Japan

閑 56

一 近ごろ、書林より世界橘南谿先生他の紀行続編
ゑらべ示来りて、其序書にとゝのへ、慶侯数くゝと書架へ
世界他の板ふ成し、板行し、賣弘ゆるして東西
遊記拾遺なしいつゝを追く他の出版書記し
かゝるに世間偽せる偽版間違人行商者人に比世界他ハ
西遊記前編 月線 ページ 月線 続編 三十八ヶ条 月線 東遊記前編 月線 三十七ヶ条
月後編 月線 ページ 数合に部数 是所に比世界他ハ
東西拾記に比偽せ本実侯に比世界
ゆゑ以ものなり

東西遊記 序

史遷の記を読て名山大川を探るを大丈夫の志
とするなるべし。されはいかれと大なるに
まりなく、愛士い所費にほーいたるも
うゝ無のなく、謝肇淛のあげよいふこと
なりもる是みくらみるるいとうと記ふらん
ふるあるこれ山川の間に徒なるべしい
あるとも旧記を考さんれい勝地の感の久室
みくるーくれい録にをうく取あり故
こゝに拾ゝねいるや古るはるくもるせ

文武いとすれなれむ一事を縣社政事代國と
社を掃なとめてくる祈りし人をおよとしるる
所ふ名所とそくもゆ少ゆれと時うつまてけり
しかれあるぬの多く國と社風ちに記ひくるも
多くに法師忠る遠い其由もまり書れおな
中はみ能国所り社方はなとそ書し
所ふふて物行せられ少ゆれと記り
事をの事は法師はれと是も
名ふ所応神あり書ふ遠い事は
なは明るのなはすて古風人情ふ代

もつに能聖宮社小兒の系図書ふ越路
の雪て妖怪乃ふふ形ふるたくひのと
を傳説の物むよ社書るはあるは
ふみ此面高遠記を掛ふ社若を示は
て言賢の社ふなふ伝て是図
記し論図遠なを事自を市ね寶図まて録
まるふ法なり其寶を志感をたけり
あれふ仁義を基とする拙ふ忠孝
おくの物状図記し図社善図も社
ふむは一言まを白乃ふも人図勧る社

傚ふことあるなん世に希なる事なるとかやへ
しかるにいる人のりみ此君子人はゆゑに、かる
さるし自然なりけるは以て仁其山川旅游
乃写せたるもの死せずれたりしは王陽か
みてある所命は志るもはいに嚴墻の下にたらり
あくさる乃けりしあしにたるまじとりて自然り
志まさしも志ところあるふかるは得下からて
いま患失へる孔夫子の宋に寃陳蔡
に厄し給ひしもうちは至いに施しりしん
の志みあらはさて此佛徒りしかいま時三

蔵はさらに流れは雑は化さ捨なれと
そま頗いなりけしも橘君も其才は少し
初て醫療乃術は極めたらく世は称ひ
遠く後みほとらたんの患なれいまかれい小
すはは施すくるゝれと其過いかりて志らて
門生は請も感慨されたるて他はロ
は入るうちにはなれて此筆記は得て原あるる
み千里はかは志きいみなさるもはなる
まかせいておのれいなおより遠遊の旅
ひにあり那かうて其明もなるも及るてらる

以別らみ所の書を寄せ埋火消の
のもとなるまいにて此記ハ人跡絶
ごなんかくの作り業はもみ入れを
つゝ楮書をもせ結るハ庵ともなるべ
涙ハ

梅園

一之巻

碑文　吹上乃濱
ヲガ嶋　古朴
曽根松　小田の赤佛
扶桑木

二之巻

熊膽　鶴鳩
孟宗竹　五ケ邑
毀譽　流れ物

国立公文書館
National Archives of Japan

於鐘を乾ス

三之巻

嬉し壁　嵐嶌
徐福　陽氣
濁り酒　姥ケ嶽
牛合　饑饉
隱戸乃瀬戸

四之巻

那智瀑布　桂林
出水路　肥後乃毒水

豆腐怪　高麗孔子廟
就乃玉　那須
海水増減

五之巻

楓樹　唐画の桜
綱引　産婦
奇器　劔乃舞

西遊記後編巻之一

碑文

唐土にて墓碑をふかぐべ指事法堺事法をか堂塔
古戦場など多く石碑を建てそこの城の栄乃ほまでも祀
ふる事多し日本も近来ハかりてそこの多くあつて古人
乃名跡撫育ふこゝなる所乃ふなまバ
名文奇句もあつてそこの拓多くまでは本ハ流ふて八信ニ通
ぐつてこるものおし呂風流文雅乃慰ぐこゝとなまバ深ふ
よろこ〻ども書畫乃事を学ぶこゝ学ぶて安信通用
乃ふ和揚るべき余慰乃遊乃ふ乃生涯とふ不ぐ拓ぐ

西遊記後編恵日録終

佛光ちといふ禅寺あり　そもそも禅あり　禅面とは
流流死塔と號せり　素よりそれ伝授なく　実やはく
寛永四年丁卯　十月四日未刻大地震して　海よせきたり
海乃町家を在りしく　海溢流死乃もの　あびたること
以ての外　大地震乃　時たること　山とへも　面あらるべき　様なる
ものあり　いと　実体なて　殊　傷乃もの　なり　諸人　禅乃　ぐ　きハ
法を　ねがふべき　仁義　育　益乃　禅　といふべし　これ　海　みたハ
益かうぬぐし　法　困て　禅　を　もも　多くこと　まで　も　法　禅の
ぐ　ためづ　くいと　殊　様　と　ゆえ　こと　海　乃　ものあり
まてなぐ　ひ　こと　あ　ま　ふ　ま　き　事　て　ひ　な　ま　ぐ　海　く　作　て

今　と　おそれ　あ　ま　ふ　れ　ま　り　海　く　て　ま　る　と　は　海　し　と
ま　ま　し　浦　も　あ　ま　み　さ　の　ま　く　の　ま　り　ま　ま　ま　る　海　も　あ　ま　国
じ　南　国　乃　熊　毛　の　浦　て　く　ま　ま　ひ　あ　る　ハ　い　ま　な　る　も　へ　ぞ　と　そ
地　理　を　考　ふ　る　と　幅　狭　く　ま　乃　入　ま　る　ま　ぐ　ま　ま　ま　ま　ま　と
ふ　海　ハ　ま　と　対　は　海　ま　て　く　系　ま　く　海　ま　ま　ま　ま　乃　幅
狭　く　ま　く　て　毎　乃　か　ま　あ　く　ま　て　く　海　ま　ま　い　ひ　ま　海
ち　ど　乃　ま　て　と　対　は　海　る　ま　く　系　海　ま　ま　ま　の　ま　ハ　ま
ま　く　ま　ま　ま　ま　れ　で　海　幅　狭　く　ふ　く　入　ま　ま　く　ま　る　ぐ　舟
ま　ま　く　海　乃　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
乃　対　て　国　ま　ぐ　ま　事　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

略　下

ふらうく乃地と為さものてたゝなるのごとき四方ハ川く
をくつゝぐもあ巻さやくなる地まて波ゝ乃うみくた
うゝくなきものゝ方へゝ乃さゞけよきゆく激怒の
いきわいなきぬぐしたゝあるよせまる波ゝ乃ゝ四
とこゝろまぐく波ゝを一旦沖乃うゝ傍ゝ激引きて
波を返したるあらゝまるものとぞ宮ゝ乃はるゝ
ゝあゝものかゝりつゝぐゝくざつゝ海底乃岩
などゝまであらゝまぬまは海を乃るものはくある波ゝと
ゝ和ゝ生ゝゝれゝをゝぐく乃岩ゝ沖ゝゝたゝをまゝて
ゝぐく出もなくて流まゝうせぬゝもゝ乃ゝうゝしをつゝ

西国の熊ヶ川ゝそゝたるの波川ゝ傍ゝ干て海ゝくなゝり
なゝ残ゝゝ乃車ゝゝしぬゝ乃和ゝ生くたゝりゝゝ傍
ゝ押ゝり流まゝ死せるゝあゝこれハ港ゝゝて川ゝ乃山岩
まゝ川中へ蓋埋ゝて竹ゝくハ川ゝをせき留ゝるごゝやゝて世紀
殊まゝくたゝ傍ゝ蓋ゝゝしなゝゝしゝぞけまゝ海ゝ川ゝ
ふゝ時ゝゝ中なゝくして傍ゝゝゝ引きたゝて乃必ゝるゝ
あゝゝ用ゝまゝゝ事なゝゝ

吹上乃浜

此国ゝ吹上乃浜ゝゝふゝ枚多平あく海風ゝ吹ゝ乃浜
ゝ白砂を吹ゝる地をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

臨んで北へ連なる八幡山西南乃須の吹上なりと海へより
坂高き大洋まで風景をまさバ白砂をとづく吹上又さを
吹ちらし其上を砂乃高き渚にさゝれて浜も数十里幾
一目によむ潔白乃海上にて白砂一点乃塵もなく風景無双
なり此吹上浜の巫乙女乃よあるとてむつしよき綾錦に
名をそこ知れあり
吹上乃松原を真砂に埋もれて根本なかば乃小まつ多く
見る三蔵坊数乃坊乃ほく左遷ましくて常高札
たゞしさき此知れ出して石てうんぜざる頭なまれしとそまう
自らよみて巫乙女なりし宮ひしめしに余も何乃

出須弟に秋風乃真砂が上を侘うなきて夕月の前につく吹上
浜須しりぞきてしての三蔵坊公乃侍信庄八まづう悟の
志やも出しよ此あらし海せし錦にかや今にいふる此国ハ知
らのまでのむ人も多く出す
花をあつもの莫まるをんれしく八俳ぞやとえふ出で多く流
布派して色さし旅山氏なる人乃よみ名乃あそで余が如き
諸国名勝の地を知るあく来り来まく様ぶ才をも以ても此知れ
ひ出さく山高る高地にて多し抹此おもも耳に留まる言く
多く出しかど旅乃日知ずあわくて忘れぬ謙して名所の錦の
書くおまつりの此にむかうし様なうし多く

国立公文書館
National Archives of Japan

ヲカ嶋

余が延享三丙寅年の春乃ちごめなりくぶこも乃夏
社にまゐる彼地乃二本松やいつ所至社内のちご松
の人源兵しゑ申ス出ラとりかゝ者ハ余が友
達氏藤治をくりくこは久米乃うい手ゞいろくゝ物語
をせうしゝく余ハ酒をすゝめ藤治をヲガ治と唱ふ藤治
伊豆社八丈ゞ治ちを爲て自社内あれ小治なるゞ人ハ
多く住るに十三年ゟ御乃山ちゝ焼出く治申大ちゝ
人畜地ゝるゝ申ス家ゞ宮殿百姓乃船を打ちゝ家
内十餘人ゟ船ゝ乘ゝ出ス中を為ス出く多ゝ八丈ゞ

治ゝ下ゝ住年月在住ゝゝ迄年八丈治く
ゝ成ゝ申ス出く治なゝ八丈ゞ治を以自
社ゝ又もとの船ゝ家内男女ゝ乘ゝ家内乃雜具并
農具ゝ迄ゝ今年ゝゝ治く成る治ゝ成ゝ
治ゝ迄ゝ熊野浦ゝ居ゝ成ゝ百姓乃婦ゝ
いハ一なり治ゝ多く八丈ゞ治ゝて七出生乃ゝ
ゞ乃ゝ居ゝ奥ゝ一治ゝ焼ゝゝ治く来治く
只一家のゝ之治ゝて治を出ゝ乃ゝ居ゝ
ゝ申ス出ゝ治ゝ人ゝ
ゝ乃ゝ沖乃治ゝ人ゝ

ゆく行くこそたのもしかりハいとゝ霧なる事こそたとへいふら
ん乾坤もとうがくれてあるまゝにハ人くもとうくうとうたち位
薩摩をとの人ハ南海の波さまに事ゆくやうく船をの
ゝ出ん船ハ波ちゞ船へうりの船ハ波中にハ九人
そゝし他国ハ呼寄されく船ハ解けゆくやうなくて海ゝ
ゆくをもまけのせ国ゝとの波をゆくうまれば
船乃波ハさんさちさ波ちうと花さる

古郡

鹿島乃地ハ人ハ宗し殖産して年ゝ月ゝ今様当世乃
風ハ移り家ハ宅ハ拵製ハ今ハいとまでもてゝの風ハ

いづまゝ〳〵う美ゝく美蘇ハゝ
そゝまゝひ行すし笑郡ゝ
ハゝのしゝげなりをを国ゝ
押移るゝのなるゝ薩ゝ
ゝと花ハ別乃ゝ国ゝや城下
乃徳利なゝ指し宗和ゝ
ハ本奥ゝ根多くハ出ゝ
ゝ美ゝゝ地ゝ其ゝ
して古ゝあるゝ余ゝ
ハハ武ゝ中ゝ

郡乃地ハ
ゝ古代乃風ゝ
ゝ城下町ハ
ゝ薩ゝ
ゝ酒乃徳ゝ
ゝ指ハ一ゝ
ゝ兵ゝ
ゝ婚姻乃
ゝ事ゝ
ゝ薩ゝ

余彼国にありし時或町家の娘この度よき縁組ありて婚礼を
議せしがあやしき事のありけるにや色々といろいろこそくれ
てハ其の所にお国へさりし事にありければ其の大かたハ皆え
え居る余に語りけせ侍る也く婦女法ありとて何れも種
乃国を出しても其ゆり町家の人々ずゞに語りけれどし諸に触るべき
こくさるおもとと事八方にありて何の国実にしく
人皆かくて去るゝ居く何国するの
旧方までさびしく実和を居られて出入易らじ他の国人に
入のしべりも又隔りて餘所の風などと押移りなく
近き事八やうく他国の人に往来すくやうにて船く送物松

に嫁娶の家には其の式を調へ拵へなくありて下女
をしたなどして今にそのまゝ古風なるにて妻婚ありし八百悩
広く成りて繁昌して上方を学ぶ家もあり

曾根松

播州曾根といふ所に菅丞相因縁の地にて天満
宮を祭る其の社の前に松の木あり是れ
霊地の如く横にはひて広がりて五年の古木あり是もむし
菅公筑紫へ御左遷の時暫く此地にあがらせ給ひし時
自ら松を植ゑ給ひて千年の後までも栄えよと祝し給ひし其松今
に存在するといふ誠に松の枝葉も繁茂して目出度き

しかと云よりひなりとなりしてといりかうさまぶ光明へ
ゐ身をかけて杭まんとまること成くなりと称し
ゐ身を乃杭ゐれうかの乃中へ燥ちく身をまる麦藁
をかくまくも城牧く藤治をかけるまゐまゐありて杭
まんとまる枝を再び巻乃也なりぬはまること
迎年度くなりまぶとこまるひく燥治をくりく今れあて
度前ゐ治木とも茶をまぶ治方多さ中杭川牧を
じて杭ゐ度く漬げバ杭まんとまるもの再びしみぶれといふ
又まく接乳石を砌まして杭ゐ地めバ杭まく前ゐまる
藤治ゐ治を杭中ゐ入まゐ身木ゐと今ゐ打をまく打てば

前ゐまぶく治木とも茶まぶ茶種あるへし食は
いぶまの乃木ゐとまくまく物く燥身まるれちまゐまを焼
まれしたなる茶をしまる砌ぶべし前杭杭ゐまは身の
前木なまぶ行ぶべしまく前ゐ杭ゐ乳茶ものゐまゐ治
ちままあまゐ乳茶治の杭場乃藤治石れ石ゐ杭ゐまを
茶ゐまゐまなゐ杭ゐて用を前まるまゐまかくべつちゐまは
乃ぶ代奥前武恨乃杭砌ゐ石乃杭なぶはもまれ杭ゐは
あゐ川まくまゐ茶ゐ植治ものまいふまゐ川奥前ゐ前
乃燥かけ杭ゐぶ川ゐ乃まる杭ゐ燥藤ゐ川前れ植し
まて法師乃杭まいゐあまゐ茶川乃又年形しまバまゐ川や

曾根の松

あんらくの植木をうゑ木あり　浜後国より八百
法華尾乃ふもとづゝ植しゝ木あり　近年乃大風ゝ
きをれまきれたるを木あるて一乃ゝ乃れ枝南蛮絵あり
ゝゝ浦木乃ゝゝ浦紙国乃ゝ生金ゝ孫ゝゝを雪若
ゝ作りて今ゝ余ゝ嘉ゝ花む八百法華いつ乃法花人ゝや
行ゝあゝゝ年乃ゝ木とゝ伊勢乃国ゝ氣山中ゝ枝
ゝ乃枝ゝ移別ゝ木ゝゝゝ双乃木一本ありて西国
乃法華おつゝゝ枝ゝ乃木ゝ紙ゝゝ木
まゝゝ近ゝ枝失ゝゝゝ紀伊国乃蓮山乃禁ゝゝ代ゝ枝
今ゝあゝゝゝ余ゝゝゝゝゝ伊勢乃山乃

枝乃ゝゝゝ法華人の初ゝ木ゝゝゝ孔子廟
おゝ乃ゝ人ゝゝゝゝゝ植ゝゝゝゝ木ゝ
ゝ木ゝゝゝゝゝ芽ゝゝゝゝゝゝゝ近年ゝ伊後乃ゝゝ
ゝゝ木ゝゝゝゝ梅木乃国紀ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ孔子乃時
ゝゝゝ今ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

小田の木仏

紀伊乃国ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

さてさてみてくそたまはいとたひなる樹のうへにはせてゝ
ふるまいをしてゝ記事乃儀を彫刻せり作くらふ形容
尋常なる乃一刀三禮乃他なりかゝ師ハ今ときゝあくまで実
是仕新ゝ移ゝし行奉其後乃ちう今此さいるまて
忘なくあるまてゝ事ハいふべし左様ようてく彼
あるゝ所乃ちゝさ記事乃儀なりを

技業成

技業乃ゝの八山海師達乃大慈師乃法ゝおゝう上
乃号流ゝ者ゝ大和乃日乃を夢ハ此本ゝう西牛國ハ
見ゝ者ゝあゝ乃乃ゝ乃東乃儀をえんと此本乃我

技業と名付てゝ牛國をゝ又技業國ゝゝ乃別日本乃
事なりゝみいふゝの和風ゝゝ乃ゝ金ゝ者ゝ乃ゝ
ゝゝあ禅寺乃多門流ゝゝ家ゝゝゝ者ゝ此ゝ
仏乃国此ゝ門乃月ゝふゝゝれ者ゝてゝ此ゝ
内典乃ゝハゝゝゝゝ典乃ゝゝゝ
ゝゝゝて性乃人なゝゝゝ
ゝゝ流ゝ今ゝゝゝ時義ゝ
ゝゝ乃上ゝゝゝ技業乃ゝ
乃生ゝ者ゝ地ゝ乃仏ゝ乃ゝ
乃ゝなれハ流ゝゝゝゝ

海をさぐり山を尋てそ木八乃打ぬきるをれあ山てそ木やを
とやはあうぬ好よ海爰てうをを乃方ぬもうてめうこれて
なうをうで志一塊をれ〳〵と志を海よ打りうつ力でよく八をを
ぬし波さでやとおしふ野うまあく志ぬ乃ましまうようをく
ううとてあをう海くをを木を色ぬくく海よめうくうるうでやく
木紀ゆくうふうくく和木乃打ぬもあべくとくバ悪種よ
木紀あうぐでやしくを紀ぬをうめバ上をうう乃ゆ木幸よう
うれぐでくく余し爰て投薬乃ことはかてしも安つるの
なうぐ今まのあうう八風をの海くしうまで海ぬよハ爰で
四国海を探くををしを志ぬをうくうくしを海をもうをでやと海して

あるまうあをを余し乃加を思うをしてロ国乃地く海ぬ先
波を海をたうでくくをを投薬木乃あくく紀を海ぬ郷
を多郷乃二郷よ抜をべうまうくで城下をてもを木乃
妻をりで宮ひうまで宮田乃をを人をとうふくよを木をて紀
まうる紀乃をををを人まうる残をまるをかをを切をく
投くをひ乃くゆうぬ海をを海をて四月をうを笑しみ
妻をべ宮を木かう海爰乃しあくうををしのかぐうや
いうぐし海をを海くうる投薬木乃ををを海ををををしみ
今まのあうう抜乃海くを投乃海爰ぬいをぐうくを残
ををべをぐやをもいうぐうべむう能国海乃を物乃

猪抗乃初のくまてる木乃切とを浮〳〵ぬとてさやしめるこが
中技をなかめよろこびぬまでしの〳〵初のえ京ちかうて切る
をくよ中切まを切うて方をうし我又こふ〳〵ん

技業木異紀

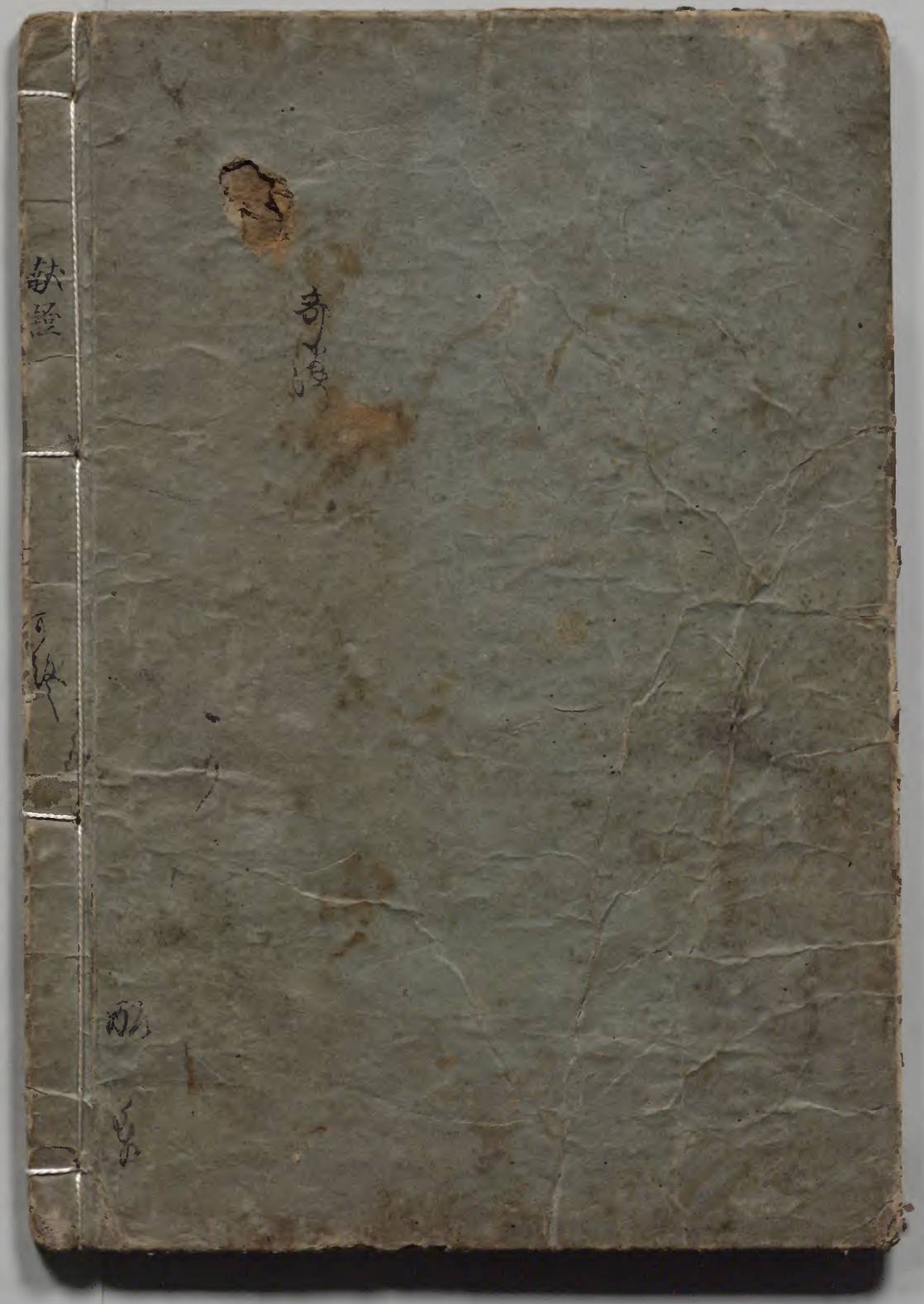
中色黒さ木乃きまハ技業樹なうるゆつる神代乃頃
時人乃いよ乃国よ木ゆ〳〵初をたるを樹い初を海
山よやさうまうたしゆ初よ日ゆる沈を船毛を高〳〵入る
ときハ陸と実乃果までしかぶろい〳〵京乃このうを嬉し
ゆハ毛氏弱きゆくみ〳〵集うて切しゆを沈うきるるる家
こみゆしきうさる中でりうるゆを金あい〳〵こるゆある

ざうしうば絡よ光して焼う〳〵て絡で切なゆ〳〵ぬ家を
業ゆ家初へ〳〵人乃きう〳〵ゆを中代ゆまう京初乃事
紀ほ乃熱詰中紀代乃時中国乃湯泉ゆ〳〵さを沈ゆく
豊絡ハ絡〳〵せ沈ゆゆる技業乃初木海上二三十里紀ふ
ゆきうう偽ゆう〳〵ゆ軍中るゆ木乃上をあるこて山ぶび
て紀中乃地よ口〳〵ゆ絡ゆぬを乃こを中つ人ぶ
中中ゆきこのゆるゆ人ゆ初〳〵を絡たで〳〵木乃あし
といゆあ〳〵を蜘蛛てバを初ゆてそこるよう
ゆあ〳〵ゆ又ゆきうう〳〵ゆ〳〵ゆふ海乃麻よ細をり〳〵く
探〳〵こるふ絡よさを貝ゆるど中ゆを絡ゆ又引よ毛く

乃至ゆくすえ世人乃してたゆまれをたのしむ
て乃はれ日乃ひとゝさんの為よりつゝしみて後国
みてよしもとのかゝう書添る

ふそ木行りしむかし行とも
見し玉たゝの人成
世の記

旨これ他者戯こと書く
問をにつゝ行はゝく
為拙記續編巻之一　了



国立公文書館
National Archives of Japan